

以上、「山口大学独仏文学」第十九号（一九九七年七月）掲載

ミュンヘン時代（一八九四—一九三三年）

第一章 作家への道

①ラムベルク通り二番地（一八九四年四月—一八九六年九月）

②短編小説「転落」（一八九四年）

以上、「山口大学文学会志」第四十八卷（一九九七年十二月）掲載

第二章 イタリア

①最初のイタリア滞在（一八九五年七月—十月）

②短編小説「幸福への意志」（一八九六年）

③短編小説「死」（一八九七年）

④二度目のイタリア滞在（一八九六年十月—一八九八年四月）

（一）短編小説「幻滅」（一八九八年—一八九六年執筆）

以上、「山口大学独仏文学」第二十号（一九九八年七月）掲載

（二）短編小説「小男フリーデマン氏」（一八九七年）

以上、「山口大学文学会志」第四十九卷（一九九九年二月）掲載

「（三）短編小説「小男フリーデマン氏」（一八九七年）——承前——」

（三）短編小説「道化者」（一八九七年）

（四）短編小説「トビアス・ミンダーニッケル」（一八九八年）

るのである。総じて言えば、短編小説「トピアス・ミンダーニッケル」は、どうしても異常なアウトサイダーとして生きざるを得ない苦しい芸術家の胸の内を吐露した物語であった。

## 目次

若いトーマス・マンへの道 —— はじめにに代えて ——

第一章 若いトーマス・マンを「読む」ということ

第二章 若いトーマス・マンをどう読むか

第三章 「世紀末」ドイツ文学事情

リューベック時代（一八七五—一八九四年）

第一章 出自とその周辺

第二章 故郷リューベック

以上、「山口大学文学会志」第四十七卷（一九九六年十二月）掲載

第三章 幼年時代（一八七五—一八八一年）

第四章 少年時代（一八八二—一八九四年）

①私立「ドクトル・プセニウス予備高等学校」小学部（一八八二—一八八九年）

②カタリーネウム実科高等学校（一八八九—一八九四年）

③学友雑誌「春の嵐」（一八九三年）

④短編小説「幻想」（一八九三年）

まずき、どもるように次のように言うのだった。「かわいそうに。かわいそうな奴だ。すべてがなんと悲しいことだろう。俺たちふたりとも、なんと悲しい目に会うことだろう。いや、本当に分かっているよ、お前は苦しんでいるのだ。」このようにして、この短編小説は結末を迎えるが、ここでもまた、犬のエーザウへの悲しみの言葉はトビアス自身への言葉でもある。彼は顔をエーザウに押し付けて泣き続けるが、おそらくそれは、エーザウのためというよりも、むしろ自分のための、そして自分と社会との関係が壊れたことに対する悲しみの表現であった。トビアスのエーザウとの関係においてはつねに、「痛みのもった幸福」「幸福感と憂鬱」があった。トビアスは、似非な社会との関わりではあったが、自分がそれさえも守り切れないほどの反社会的な存在であることに大いに苦しんだのである。彼は犬との小さな世界のなかでも、いわゆる他者との、すなわち社会との関係を守り続けることはできなかった。社会への、生への憧れがありながらである。

では最後に、トビアス・ミンダーニツケルという異常なアウトサイダーとはなにもものであって、トーマス・マンはなにゆえに、この人物の「謎めいたひどく破廉恥な話」を語り手をして語らせるのであろうか。主人公トビアスには、小男フリーデマン氏や道化者に繋がるところのある人物として、物を書く人の、物を考える人の、知的に物事を捉える人の、つまり作家の、トーマス・マン流に言えば芸術家の根源としての、芸術家発生前の人物が想定されていると言わざるを得ない。つまり、この主人公たちは芸術家のパロディなのである。トーマス・マンが「仮面」を被り、異常な主人公トビアスを通して語っているのは、芸術家のもつ一面を極端に強調した姿であった。彼は、芸術家にはある面ではこうした異常な主人公たちと繋がるところがあり、確かにそれはとてつもなく辛い苦しいことでもあろうが、こうした面をもっていなければ、芸術家になることも、芸術家であることもできない、と言いたいのである。そうした面を究極にまで強調した姿がトビアスであったというわけである。しかし彼がこの短編小説で強調していることは、異常な主人公を徹底的に非難することだけではない。社会への憧れをもちながら、それをどのような形であろうとも可能にすることができないという芸術家の反社会的状況、そして逆説的な形で、社会への憧れの必然性を、そしてさらにそれらのあいだで苦悩する芸術家の姿も描いてい

エーザウに対するこの言葉は、あたかも自分自身に語りかけているかのようである。以前と同じように、彼のエーザウに対する屈折した愛は彼を「憂鬱」な気持ちにさせている。

しかしエーザウは次第に元気になって、事態はまた元のようになる。エーザウはすっかり元気になって、再び乱暴に部屋を走り回るのである。トビアスは、自分の支配下にあるはずのエーザウがまたも自分の意のままになろうとしないことに不満を感じる。このようにトビアスのエーザウに対する怒りと罰の後には、エーザウはへりくだった生き物となり、するとトビアスはエーザウを「痛みのこもった幸福」でもって受け入れるのである。エーザウが苦しんでいる時、トビアスは満足げであり幸福である。エーザウが元気で喜々として飛び回る時、トビアスはいらいらし、途方に暮れ、果ては妬みをもつのである。ここに、ショーペンハウエルの哀れみの哲学とニーチエの生に対するルサンチマンの交替を、或いはマゾ・サドの関連を想起することも可能であろう（H・ヴィークマン『トーマス・マンの短編小説』、H・R・ファアゲト『トーマス・マン全短編小説注釈』）。こうした繰り返しが何度か続いた後、この短篇小説の展開は最後の破局へと繋がっていく。「彼の顔は青ざめ、悲しみに歪んでいたが、当惑して妬ましそうな、意地悪そうな横目を使いながら、彼はエーザウの跳びはねるのを身動きもしないで追っていた。」しかし突然、激怒した彼はエーザウを捕らえるが、エーザウは主人の手に噛みつき、彼を嘲笑するように逃げて行く。そしてその後には「不可解な破廉恥なこと」が起こったのである。トビアスは両腕をだらりと下げ、少々前かがみになって立っていた。「彼の唇はきつと結ばれ、目の玉は眼窩の中で不気味に震えていた。それから突然、彼はまるで気が狂ったように跳びかかり、犬をむんずと捕らえたと思うと、その手の中にはなにか大きな光るものが閃いた。すると右肩から胸の奥まで達する一突きで、犬はどっと床の上に転がり落ちた。」興奮したトビアスは不気味に震えながら立ち上がり、エーザウをナイフで突き刺したのである。主従関係を逆転せんばかりに元気になったエーザウに、トビアスは自分と社会との関係が崩れるという思いを重ね、そのことを恐れてエーザウを刺し殺したのであった。彼は幸せな気持ちで、うめいている犬に対して君臨する。しかしまた以前と同様、その後、彼は死んだエーザウの前にひざ

そして最終章の第三章、ここではトビアースと犬との関係の運命的な破滅が繰り広げられる。トビアースは出掛けることが前より少なくなり、一日中、エーザウとばかりかかわり合っている。彼には、つまり制限された社会という設定であるが、エーザウとの間の主従関係がうまく成立しているのである。尤もそれは、彼のエーザウに対する傾愛という名の調教と訓練に対する、エーザウの一方的な忍耐によって成立しているのであるが。しかし次第にエーザウは、外に出ることができないために沈鬱そうに彼を見つめることが多くなる。そんな時彼は、「せつなそうに俺をみつめているじゃないか、かわいそうなやつめ。いや本当に、この世は悲しいものだよ。それをお前も体験しているのだなあ、まだそんなに若いのに……」と、外に出ることができなくて苦しそうな様子を見せているエーザウのなかに自分の立場を見るばかりで、犬を外に出してやろうともしない。次第にエーザウは、部屋の中で暴れたり往来に飛び出して子供たちとふざけ合ったりするようになるが、それに対して彼は、「困ったような、不機嫌そうな、そわそわした目付きをして、醜い腹立たしい微笑みを浮かべ」、エーザウをがみがみと叱りつけるのであった。その後ますます乱暴になったエーザウに対し、彼はますます専制的、弾圧的になり、情け容赦もなく長い間猛烈に殴りつけるのであった。言うことを聞かないエーザウに対して、主従関係が逆になることを彼は恐れたのである。またある時、エーザウが暴れ過ぎて、誤って主人のもっていたナイフで傷を負ってしまうという事件が起こる。エーザウは「血を流しながら床に倒れて身をもがいた。」「するとトビアースは驚いてなにもかも投げ出し、傷ついたエーザウの上に身を屈めた。しかし突然、彼の顔の表情は変わった。実際、そこには安堵と幸福とのほのかな光がちらりと彼の顔をかすめたのであった。」このトビアースの安堵と幸福はなにを意味するのであるか。これまでのふたつの場合と同様である。エーザウが暴れることができなければ、主従関係が保てるのである。犬に対する優越意識の倒錯した喜びがトビアースにはある。トビアースは傷ついたエーザウを昼も夜も献身的に看病する。「ハひどく痛むかいVと彼は言った。ハそうだとも、本当にお前はひどく苦しんでいるね。かわいそうな奴め。だがおとなしくしているんだよ。我慢するよりほかにないのだからね。V——そんなことを言っている時の彼の顔は、穏やかで憂鬱で、そして幸福そうだった。」トビアースの

もうすっかり元気になっていた犬は再び駆け寄ってきて、主人の靴をなめた。」しかしこの練習がなんども続くと、エーザウも動物であり、疲れも手伝って次第に彼の命令を聞かないで、ただ床に横たわるだけで動かない。トビーンはエーザウに執拗に命令を与える。それでもエーザウは言うことを聞かない。すると彼は狂おしいほどの怒りに襲われ、その犬の首根っこをつかんでステッキでめった打ちにし、その後エーザウを床に下ろし、「深い息をつきながら両手を背にまわして大股で犬の前を行ったり来りし、時々傲然とした怒りの眼差しをエーザウの方に向けた。：彼は仰向けに寝て前足を哀願するようにな動かしている犬のそばに立ち止まって、両腕を胸の上で組み合わせ、ナポレオンが戦場で軍旗を失った中隊の前に歩み出た時と同じような、ひどく冷たく非情な目付きと口調で次のように言った。＼ちよつと聞くが、お前の振る舞いはなんてことだ。＼」トビーンはしばらく、身を擦り寄せて下からへりくだるように見上げているエーザウを黙って見下ろしていたが、突然、うめいているエーザウをやさしく抱き上げる。そして彼は、自我と社会の恍惚とした一致というべき幸福感に浸るのである。「＼それじゃ、まあ勘弁してやろう＼と彼は言った。ところが、この善良な動物が彼の顔をなめ始めると、彼の心持ちは突然、すっかり感動と憂鬱に変わった。彼はやるせない愛情で犬をひしと抱き締めた。目には涙が溢れ、言葉にならない文句を何度も息詰まるような声で繰り返した。＼なあ、本当にお前は俺の唯一の：俺のただひとつの：。＼それからエーザウを丹念に長椅子に寝かせつけ、自分もそのそばに腰掛け、片手で顎を支えながら、穏やかで静かな目でじつとエーザウを見つめるのだった。」彼のエーザウに対するこの感動や優しさは、かつての子供の場合と同じように、彼が生地の支配者、勝利者の地位を獲得したことを示している。しかしながら、そこには傷つき苦しむ犬に、自分と同じ立場を見いだして自己愛に耽っている感もある。子供の場合と同様、めった打ちにされた犬のうちに、彼は自分を見ているのである。その自己に対する屈折した愛、そのときのトビーンはの気持ちを上る文章は「憂鬱」と表現している。彼は、あの傷ついた少年を助け起こす時に感じた「痛みのもつた幸福」と同様、今、犬に対して幸福と憂鬱の入り混じった感情に満ちているのである。

らく、その犬が「黄色」なのは生の側の象徴であるプロントに繋がっているであろう。この犬は最初本能的に、自分とは異種な新しい主人に抵抗を見せる。「犬は途中ずっと抵抗し続けた。前脚を地面に突っ張って、心配そうにいぶかるように新しい主人を見上げるのであった。」また、犬の目のまわりと片耳が黒いのは、この犬がトビーンアスの仲間であることを暗示しているであろうか。彼は犬を抱き締め、人々の嘲りや高笑いを浴びながら部屋にたどりつく。そしてこの犬をいたわるように撫でながら食事を与え、その犬を「エーザウ」と名付けるのである。おそらくこの名前は、旧約聖書の創世記に出てくるイサクの双子の長男であり、賢明で人生に熟達した弟ヤーコブの悪巧みによって食べ物と引き換えに長子権を奪われ、さらに父の祝福まで横取りされるあの粗野な野の人物を思い起こさせるだろう。つまり、犬のエーザウは作品の後の展開からも分かるように、トビーンアスによってひどく虐げられ冷遇されるものとして登場しているが、またこの犬が「熟考することのない、生き生きとした生の具現」(H・R・ファーゲト「トーマス・マン全短編小説注釈」)であるからこそ、トビーンアスはその犬をなけなしのお金をはたいて買うのである。彼には今や、あの子供の事件以来、憧れの生との結び付きを切に願う気持ちが強くなっていたのである。実は、彼はその可能なチャンスを伺っていた、と言ってよいだろう。彼が犬を買ったのは、大人や子供たちから嘲笑される自分の気持ちを癒そうとしたためであったが、その時の彼には、人間との関係が成立することは不可能であり、他者との関係を築けるのは、そしてその関係において主従関係の主になれるのは犬に対してぐらいしか考えられなかったのである。今また、彼はこの犬との関係において、あの怪我をした子供を助けた時の幸福感に浸りたいのである。

今やトビーンアスには、他者との、つまり社会との関わりは、変則だが犬という形で可能になった。「彼は自分の前の床を指し示しながら、命令口調で叫んだ。ハエーザウ！V犬はもつとたくさんの食べ物をもらえると期待したらしく、実際近寄ってきた。トビーンアスは誉めそやすように、犬の横腹を叩きながら、次のように言った。ハそうだよ、そのとおり、いいね。誉めてやろう。Vそれから彼は二・三步後ずさって、床を指し示しながら、またもや命じた。ハエーザウ！Vすると、

いた。目は大きく見開かれて輝きを帯び、人や事物を自信をもって見つめていたし、口辺にはやるせない幸福の気配が漂っていた。」この文章に少し注目して見よう。子供を助け起こすことだけで、彼がこのように大きく変わったのはなにゆえだろうか。彼は子供を助けて大変生き生きとして幸福感を漂わすが、そこには彼の複雑な心理が動いているようである。つまり、この瞬間、生の脱落者であるという彼の意識は生との関わりをもった者の意識へと、自分と他人——ここでは一人の小さな子供であるが——との、つまり社会との結び付きが生まれたという意識へと変化し、それによって彼は生き生きとし幸福を感じるのであった。ここには確かに、強い形で存在していたが今まで隠れていた、彼の生への憧れが露呈している。生の生活をするためにはとりわけ、「人間や事物を避け」たり、「うろろうとした目が地面を這う」といった生に対して負けたような意識をもたないことが必要であるが、今や彼は生に対して——この場合子供であるが——はつきりとした勝利者の側に、生に対して優位者の側に身を置いているのである。心の中で押さえ付けていた生への憧れが、子供を助けるという小さな出来事ではあったが、突然、彼の心には一気に満たされたのである。勿論、そこで働いている心理は屈折した自己愛でもあったろう。その傷ついた子供の心理は、その苦しみは、実は自分のものであったので、彼には痛いほどそれがよく分かったのである。この生への憧れに満たされた瞬間の、彼の喜びは大変なものであった。しかし、その際の彼の気持ちが「痛み」のこもった幸福」と書かれていることに私たちは注意しておかねばならない。この「撞着語法」はトビアスのアンビヴァーレントな心境をよく説明している。この第一章では、極端なアウトサイダー性を保っていた彼に、それまで認められなかったひとつの特性が明らかになっているのである。

さらに第二章では、主人公トビアスと犬との重要な出会いが設定され、この新しい状況における彼のアンビヴァーレントな性格が一層明白にされる。ある春の良く晴れた午前中、彼は散歩に出掛け（あの「道化者」の主人公と同様、レルヒエンベルクの丘にである）、その途中、路上で「小さくて黄色い肉付きの良い」「目のまわりに黒い環があり、片方の耳が黒い」犬を買う（犬が作品に登場するのはこの短編小説が初めてであるが、トーマス・マンは生涯、大変な愛犬家であった）。恐

の生活をしてきた。それは、彼の服が古くみすぼらしくても、「このうえなくきれいにブラシがかけられている」ことや、彼の服装やしぐさが決して「自分の住居を取り巻いて暮らしている人たちの階級には決して数え込まれたくない」といったふうであることから明らかである。また、なんの飾りもない部屋には重たい金具のついたアンピール式の、値打ちもあり美しくもある置戸棚がある。しかし、彼が「どんなふうにして落ちぶれるようになったのか」誰も知らないし、どうして一体彼がいつも一人でいて不幸せなのか、そしてそこにどういう事情があるのかも分からないという。しかし、そうは言いながらも作者トーマス・マンにはよく分かっている。つまり、そこには「仮面」で隠された作者自身のある意図があった。そのことについてはすでに指摘したので立ち入らないが、トビアス・ミンダーニッケルは、「顔は、あたかも人生が軽蔑の笑い声をあげながら、拳を固めて真つ向から殴りつけたかのように見える。——尤も彼はおそらく、運命のひどい打撃を受けたというのではなく、単に生存そのものに適していないのかもしれない」というように、徹底的に生に反するものとして表されているが、その態度には決して生への憧れが完全に放棄されているわけではないのである。そのことは、主人公トビアスと十歳の少年との出会いによってまずは明らかにされる。

彼の日常における生との接触は市中への散歩だけである。散歩から帰ればただ「貧相な、なんの飾りもない」自分の部屋に入り、時折は花鉢を眺めたり、裸の土をかいだり」するだけで、その他には長椅子に腰掛けてじつと床を見下ろす以外には、彼にはなにもすることがないのである。いつものように彼は散歩に出掛け、いつものように子供たちが大勢集まって来て、からかったり笑ったりしながら彼の後をついてくる。そんなある時、そうした子供たちのなかの一人が転んで鼻と額から血を出して泣く、という事件が起こる。たちまち彼はくるりと振り返り、倒れた子供のそばに寄り、「おお、かわいそうに」と言いながら自分のハンカチでその子の頭を巻いてやり、その子を注意深く助け起こして歩み去るのである。その時の彼の様子は次のように描写される。「この瞬間、彼の態度と顔付きはいつもとははつきりと違った表情を見せたのであった。彼はしっかりと足取りで、そり返るようにして歩いていたし、彼の胸は窮屈なフロックコートの下で深い息づかいをして

流の名前の付け方である。若いトーマス・マンの作品の中で最も有名な主人公であるトニーオ・クレイゲルのように、トビアス・ミンダーニッケルという名前も相反するものの複合体を意味し、この名前にも私たちは作者トーマス・マンのふたつの心を見て取らなければならない。作者は主人公をただ単にミンダーニッケルとしてだけ見ているのではなく、トビアスのような面もある人物と考えているのである。確かに表面的には、トビアス・ミンダーニッケルという主人公のミンダーニッケルの要素についてだけこの作品のなかでは物語られ、トビアス的要素については作者はひたすら沈黙を守っているように見えるとしても、主人公にトビアス・ミンダーニッケルという名前を付したことにトーマス・マン一流のアイロニー、肯定と否定が入り混じったものを私たちは見て取るべきであろう。主人公に対して徹底的で残酷な描写をしながら、トーマス・マンはトビアス・ミンダーニッケルという名前を主人公につけて、自分のこの主人公に対する気持ちを、つまり一種の愛の気持ちを表明しているのである（その上、トーマス・マンは自分のイニシアルであるT・Mをこの主人公に与えている）。愛も感じる主人公を突き放すという形で、徹底的な否定を表現する作者の屈折的な姿勢を知って初めて、私たちはこの短編小説の「謎めいたひどく破廉恥な話」も、正しく読むことができよう。

さらにもうひとつ、主人公トビアスが全く異常なアウトサイダーであるということについて、ひとつの保留をしておこう。あの小男フリーデマン氏や道化者ほどではなくとも、彼にも生への憧憬は存在しているという描き方を私たちはこの第一章からも読み取ることができよう。トビアスの屈服したような態度は必ずしも生を拒否した姿とは言えないだろう。彼の態度は、小男フリーデマン氏や道化者が最初の頃、生の生活を宿命的に不可能なことを考えて、進んで生とかかわらない禁欲的な生活をしたのと明らかに違うのではなからうか。彼らは生から離れていても、こんなにもおどおどとはしていない。かたはらずである。むしろ彼らは堂々としていた。このトビアスの生き方は、生とは掛け離れた生活であっても、小男フリーデマン氏や道化者ほど確固としたものではないのであろう。つまり、トビアスにはまだ生を捨て切れないうところがあるのだ。だから彼はいつも生に対して、生への憧れのために、おどおどしているのである。かつて彼はれっきとした生の側

かに次第にその主人公たちはグロテスクさを増して、作者の意識との距離が生まれてくるとはいえ、そこに作者の自伝的要素が指摘できるように、その主人公たちはまだ作者の意識のなかにあり、意識の中での戯画化である、と言うことができた。しかしトビアスに対する作者の共感は、作品の展開が進むにつれてますます失われ、この主人公には作者との関係は全くないと言わんばかりに、彼は全く奇異な人物として冷たく突き放されている。主人公は徹頭徹尾、外側からの観察に徹して描かれており、それは「謎めいたひどく破廉恥な話だから、ぜひ語ろうと思う」というこの短編小説の冒頭の語り手の言葉からも理解できる。主人公について、「おそらく」とか「らしい」とかいう言葉がしばしば使われ、彼の過去はあまり詮索されず、性格についても「判断するのは非常に難しい」と説明が放棄されているように、作者にとって、主人公は全く関係がない他人として位置づけられ、共感もなくただ奇妙な話だから関心を引いたというわけである。こうした自分とは関わりのない主人公だからこそ、作者はかわいそうな人物として、彼を徹底的にリアルに、異常でグロテスクに描くことができるのである。

しかし主人公は作者にとって全く縁のない人物のような設定であるとしても、ここに主人公に対する作者の痛烈な批判だけを見るのは少々短絡すぎるようにも思える。つまり、そのことは先ず、主人公の名前において言えそうである。この主人公の名前は「姓をミンダーニッケル、そのうえ名をトビアスという男」と紹介される。つまり、ミンダーニッケルの「ミンダー minder」とはドイツ語では低いとか劣ったとかマイナーといったことを意味し、「ニッケル Nickel」もまた北ドイツ方言で、強情でどうにもならない人間に対して用いる表現である（H・ヴィークマン「トーマス・マンの短編小説」）。要するに、ミンダーニッケルには、下劣などにもならない男というような意味合いが被せてあるのである。しかし一方、名のトビアスというのは、ヘブライ語で神の善意を表し、ヘブライ語の旧約外典のなかの敬虔な主人公（彼もまた犬を連れていた）に由来する名であり、プラスのイメージをもっている。なんともこのトビアス・ミンダーニッケルというのは皮肉に満ちている名前であろう。しかし、名前にアンビヴァーレンツなもの結合が意味されるのは、いつもトーマス・マン一

トビアアスの風貌は「突飛で風変わりで滑稽」であり、散歩の時の服装は「頭から足の先まで黒ずくめ」で、旧式なシルクハット、古光りしているフロックコート、擦り切れたズボンという出で立ちであり、痩せた首、灰色になった髪、土色の顔、落ちくぼんだ頬、めったに上を向くことのないただれた目、鼻から垂れ下がった口の両端まで陰気に走っている二本の深い皺など、なにからなにまで彼の道具立ては醜い。さらに彼のアウトサイダー性は彼の世間からの孤立や孤独によって強調される。このように彼は風貌や服装からも、完全に生を捨てた人間というわけであり、外へ出れば大人の沈黙の視線のきついことは当然であるとしても、子供たちまでもが彼を囁し立て嘲笑し、上着を引っ張るといふ行為は、彼のすべてがこの現実の生にはそぐわないことの証明であろう。彼は世間の目を無視して逃げるとともに、世間に対していつもへつらうような態度を取るのである。「彼自身は、別にそれを止めさせようともせず、おずおず自分のまわりに目をやりながら、肩を高くもたげ首を前につき出したまま、ちょうど傘なしでわか雨の中を急いでゆく人のような恰好で歩いて行く。そして面と向って笑われているのに、彼は時々へりくだった丁寧さで、戸口の前に立っている人たちの誰かに挨拶したりしている。」しかし彼のこの劣等的な態度も、大人たちに見られ子供に罵られ追われるからでもないようである。彼のこうした態度は子供たちや知っている人たちがいなくなっても「大して変わらない」のである。彼はいつも「あたかも自分に対する無数の嘲笑する視線を感じているかのように、びくびくと自分のまわりに目をやりながら、身を屈めて前に突き進んでゆく。そしてためらいがちにおずおずと目を地面から上げるたびに、：彼のうろろうろした眼は、人物や事物を避けて地面を這わずにはいられないのである。」いつも彼はこのような奇妙な、現実に屈服した態度を見せるのであった。

なんとも卑屈な孤立した主人公だろう。トビアアスのアウトサイダー性、冷たく突き放されたような彼の描かれ方は、前のふたつの短編小説「小男フリーデマン氏」と「道化者」の主人公とはかなり異なっている。この二人の主人公は、日常的「生」を断念して自分の中に独自の幸福を築こうとするが、「生」への憧れを完全には押さえ切れずに生への憧憬を深めていき、現実において生との結合を試みて破滅するのであり、そこには作者トーマス・マンの意識に近いものが見て取れる。確

## (四) 短編小説「トビアス・ミンダーニツケル」(一八九八年)

トーマス・マンは短編小説「トビアス・ミンダーニツケル」を一八九七年七月、ローマで執筆したが、発表は一八九八年一月の雑誌「新ドイツ展望」においてであった。この短編小説の主人公トビアス・ミンダーニツケルは、これまでのトーマス・マンの主人公たちのなかでも最も異常で病的な主人公であろう。彼のこれまでのどの作品の主人公と比べても、この主人公トビアスは、愛もなく突き放された形で否定的に描かれている。尤も彼には肉体的異常さはないが、その風貌は「突飛で風変わりで滑稽」であり、彼は「人間にも、或いはただの事物にもしつかり落ち着いて目を注ぐことができないのである。奇妙に聞こえるかも知れないが、個々人が現象世界をながめる時のあの自然な、感覚的に知覚する優越性というものが彼には欠けているようであり、彼はどんな現象に対しても負けたように感じるらしく、そのため彼のうろろした眼は、人物や事物を避けて地面を這わずにはいられないのである。」彼はそのような精神的な異常さの持ち主であった。また彼は、「いつも一人で並はずれて不幸」で、「単に生存そのものに適さない」受け身の屈従と内気さをもつ、つまり、普通の人たちとは接触をもたない、人間社会からはみ出した無為徒食の生活喪失者である。作者トーマス・マンは、主人公トビアスが「生」からの脱落者、アウトサイダーであることを冒頭から執拗に描いていく。

この短編小説は三つの構成から成っているが、第一章においてはアウトサイダーである主人公の性格や生活状況が提示され、小説の後の展開に有益な指摘を与えている。主人公のトビアス・ミンダーニツケルがその名も「灰色通り」という通りに面した、貧乏な人たちの住んでいる安アパートの四階に一人で暮らしている、という冒頭の設定はアウトサイダーの主人公を表すにはふさわしい環境であろう。ここでスケッチされている彼の様々な境遇は、彼が社会的には中流階級以下に組み込まれる人物であることを示しているが、私たちはまた、彼が元々この階級に属する人間ではなく、運命によってこの貧しくて哀れな境遇に押しやられているということに注意しておかねばならない。こうして主人公のアウトサイダー的環境が示された後、彼の精神的異常さが強調される。

またすでに指摘したことであるが、短編小説「道化者」の大きな特徴として、作者トーマス・マンのその当時の生活模様が具体的に読み取れるということだった。この点について最後にさらに指摘しておきたいことがある。確かに「道化者」に若いトーマス・マンの自伝的要素が濃いことはこれまでの考察で明らかであるが、またそうとも言いきれぬところもあることを述べておかねばならない。つまり、道化者の「私」には作者トーマス・マンというよりも、より多く兄のハインリヒ・マンが見て取れるのではなからうか。作品の冒頭から描かれる道化者である「私」のように、まだ父の存命中に材木店に勤めることを嫌って書店に勤め、いつも膝の上に本を乗せ、「多くの本を、手に入る本のすべてを読んだ」のも、そして父の死後に遺産を旅行のために浪費し、外国でボヘミアンのような生活をしたのも、また身を焦がすような失恋をしたのも紛れもなく、トーマスではなく兄のハインリヒであった。つまり、こうしたことはトーマス・マンがこの短編小説をイタリアのローマで兄ハインリヒとの共同生活の中で書き上げたという事実に因っている。この短編小説の主人公の「私」が二十七歳であることも、この作品が完成した一八九七年四月には二十六歳になっていたハインリヒとなにか結び付くものがある。このように、主人公にハインリヒの性格が大いに潜んでいるとなると、やはりこの短編小説「道化者」は、彼に対する残酷な非難であると言うこともできよう。トーマス・マンは、しばしば言われているように、親族や友人たちを自分の物語のためにモデルとして使った。「私は私の作品の中では、他人に対する少々の無思慮などほとんど問題にするに足らないといった情熱で、自分自身というものをさらけ出しています。」（一九〇四年八月十九日付けのO・グラフトフに宛てた手紙）。しかし、そんな彼にも確かに少なからず、罪の意識はあった。しかし、つねに冷たい観察眼をもって物事を見つめるというのが彼の作品における手法であるとしても、確かに「道化者」における兄ハインリヒを想起させる肖像画は、共同生活をしている彼を不愉快にさせ、彼が自分に対する裏切り行為と考えたとしても仕方ないものであつたらう。この時点に、後の第一次世界大戦時に頂点に達した兄弟間の不和の始まりを見るのもあながち間違いとも言えないだろう。

の曲がり角のなかをさまよいながらも、自分と世間との関係について以下のように了解するのである。

「私」は今や、はつきり不幸を感じ、「哀れで嫌悪を催す見物」と化している、という。というのも、「私」にとって唯一の不幸といふべき「自分自身に対して好意を失い、自分が氣に入らなくなつて」いるからであつた。どうしたら社会と良い関係を保てるかについて、読者に説明するような文章がその後が続いているが、それは古い知人を例に説明されている。世間の人は「自分のことにあまり熱心にかかわっているから、真面目に他人についての意見をもつことができない」、だから人は自分で自分を氣に入らなくなつて注意しなければならぬ。「自分の思ふがままに存在し、望むがままに生活してよいのだ。しかし大胆な自信を見せて、やましい良心など見せないことだ。」そうすれば世間はその人を尊敬するだろう。もし自分自身との一致を失くし、「私」のように、自己満足を失い、自分自身を軽蔑しているような様子を見せると、すぐにも世間はそのようにしかその人を扱わなくなり、それを当然だと認めてしまふだろう。「私」は自分が不幸にならないように、満足を得るように試みた。しかし自分自身との軋轢、虚栄心との闘いなどにおいて、自分に自信がもてなくなつた。そうであつたところに「私」の破滅の根源があつたが、これが主人公である「私」の得た世間とのあるべき関係であつた。さらにこの短編小説にはエピローグがある。主人公である書き手は嘔吐でもう書けない、もうこの問題は終わりにしたいという。しかし「道化者」にはそれもふさわしいことであろうという。そして最後に、作者トーマス・マンの意図といふべきものが暗示されて、この短編小説は締めくくられる。「道化者」には、これからも「不幸な笑うべき存在」として生きることが免れないことかもしれない。道化者が社会のなかで喝采を望みながら、社会で生きて行くことはまさしく難しいことなのであり、悲しい宿命、不幸が待っているのだ。道化者には幸福への意志は必ず破滅をもたらすという。作者トーマス・マンはこの短編小説において、破滅して行かざるを得ない道化者の運命を描いて、芸術家の根源にはそのような道化者的な要素があること、そして芸術家には社会への意志がありながら、それが容易に開かず、閉ざされていることを暗示したのであつた。

「私」は以前から、自分のやることを他の人がどのように考えていようとおかまいなしに、むしろ誇りをもって自分の立場を誇示していたが、一方ではまた、「社会Vを無視し」たり、「社会の蔑視や黙殺に耐えるには、あまりにも見栄坊で社会の喝采なしには生きていけない」人間でもあった。「私」は無関心であればよかつたろう。世間に対して、そして自分に対して無関心であれば、幸福だつたらう。しかし「私」は、「光の子」になりたいという虚栄心のために、「世間の人たちと違った目で自分を見ること」ができない。そのために「私」は、「生」の仲間入りをしようとして女性に近づいたのである。しかし、「生」は「私」の思っていたとおりではなかった。「私」はあまりに不用意に、二人の「生」の間に立ったために、すぐにも「生」の自分を見つめる目をはつきり意識することになり、それも「私」の心が変化しつつある、自分の立場への疑義が生じ始めた頃であつたのでなおさらのこと、「生」の人間のちょっとした眼差しにも、「生」の自分を冷たく見る蔑視の目をはつきりと感じたのである。「私」は自分の心の中に、自分に対する疑義とともに高まつている「生」への愛が「生」の人間には少しも受け入れられないで、道化にしか見られないことで自分を恥じ入ることになる。「生」のなかでは自分の道化的才能はその立場を理解されず、「私」は今やはつきりと自分の虚栄心が否定されるのを感じ、自分の社会における生き方を否定されて、破滅を道化者であるゆえの運命的なものと考えるのである。「私」には「生」の中で自分を位置づけてみようという思いがあり、それは無垢で純粹で、悪気など全くないものであつたが、またそれはおこがましい恥じ入るほどの試みであつた。そのために、つまりそれが「やましい良心」であつたために「私」は破滅してしまふのである。しかし、その「やましい良心」というのは「化膿した虚栄心」、いわゆる虚栄心のうずきから生まれてくるものであり、この道化者は、あまりにも唐突に自分の強い虚栄心が否定されたために、この章の冒頭に見るように、瞬間的に運命的な敗北を感じ取り、最後の「幸福意識と自己満足」までも失い、「もう駄目だ。そう、白状するが私は不幸なのだ。そして私自身、哀れな笑い者なのだ」と、あまりのショックに耐えることができず、近いうちに自殺するつもりだという。

そしてその後、この章のまとめが書かれる。幼少年時代に大変快活であつた主人公は、今やどうすることもできない人生

し、自分を笑ひ者にしてしまったのだという思いが私を襲つてきて、おぼつかなさや心細さ、憎しみ、そして哀れさで私の視線は行き場を失つた。」彼女は実際、なにもしたわけでもなく、ただ無言でワインを渡してくれただけなのに、「私」は、「目も上げずに怒りと苦痛で赤くなつてうろたえ、不幸な滑稽な人物として、このふたりの間に立ったまま二口三口飲んで」戸外に転がるように飛び出していったのであった。そしてその瞬間、「私」は自分が駄目になつたと感じ、自分の運命的發展を考へるのである。このときすでに、「私」の自分に対する「不機嫌や半ば絶望の気持ち」は決定したのであった。それは数日後、この女性とあの若者との婚約の記事が新聞に載つたときにはすでに、はつきりと「私」の心は破局へと向かつていたほど早急なものであった。「私」は「光の子」への参加を試みたのであるが、これは「私」自身によって、「虚栄心のうずき」「やましい良心」と説明され、「私」が道化者であることが明確にされる。

第十四章。「私」は瞬間的に自分の破滅を感じたのだが、その「私」の破滅は「自分が自分を好きになる」といつた失恋とは明らかに異なり、「自分自身に対する好意のすべてが望みもなく失われている」ひどい状態にあるものという。「かけがない近寄り難いあの女性」への「苦しみながらも頭を持ち上げ、羨望と憎しみと自己軽蔑の感情」をもたらした「私」の「恋」は、「ずっと前からすでに苛立ち病んでいた虚栄心の所産」だったのである。つまり、自分もひとりの快活な「生」の女性に恋することができ、自分も世間の人間と同じであつて、自分を世間の人間と別の目で見ることができないという意識、換言すれば、「生」のなかで理解され、「生」への傾向をもつことこそ自分の一人の人間としての生きる道であるという意識が生んだ恋だったのである。「かけがない近寄り難いあの女性」を見た時、「私」の心の中には、自分も「生」に認められたいという虚栄心が恋という形でたちまちやるせなく燃え上がり、嫉妬と憎悪、自蔑が恋を生んだのである。つまり、彼女への気持ちは恋というより「虚栄心にすぎな」かつたのである。従つて「あの女性」と面と向かい合つたとき沸き出た、「私」の「あの羨望と愛と羞恥と苛立たしい悲痛との混ざりあつた、苦しいみじめな気持ち」は、恋というよりも、むしろ「生」に憧れる心から生まれ出たものであつた。

ら疎外され屈折した心が、オペラの終幕後、夜空の中を彼らの後を追って行く「私」の姿に、つまり「ひどく打ちひしがれて、刺すように痛く嘲りのある惨めな感情」に包まれている姿に表現されているが、そこにはまた、はっきりとした「光の子」に対する憧れも存在していることが明白に示されている。その親子の入っていった家の扉のそばには、「法律顧問官ライナー」という表札が掛っていた。

第十三章の冒頭で書き手が、「私はこの問題では疲弊するほどに心を掘り起こされ打ち抜かれた。こんなことすべてに嫌悪を覚えるほどにうんざりしている」と書いているように、この章は「私にまだ残っている暗れやかな落ち着きや自信のある機敏さを使いこなすだけの力があるのか、この最近の数週間の不機嫌や半ば絶望の気持ちがあるものだったのか」が明白にされる章である。「私」は今や、自分のこれまでの生き方を全面肯定して論理的に根拠づけることの困難を感じている。

「私」は、バザーが市役所で上流階級の賛助の下に催されるといふ新聞の広告を読み、例の女性も売り子なんかで出ているのではないか、彼女に近づいて話をしてみようかと決心して出掛ける。そのバザーは音楽や福引や陽気な宣伝の騒音などのなかにあった。会場の入り口に近いところで「私」は、「イタリア婦人の衣装を着けた」売り子をしているその女性を見つめる。彼女は大勢の紳士たちと喋っており、そのなかには彼女が劇場で話していたあの若い男もいた。彼女のそばを通り過ぎながら「私」は、彼女に話しかける機を窺い、突然、「私」は彼女とあの若い男との会話をさえぎり、「ワインを一杯お願います」と陰鬱に眉をしかめ、囁いた声で彼女に向かって短く、ほとんど乱暴に言う。彼女に近づくために興奮していらしなながらも、「冗談めかした言い回しや気の利いた言葉、イタリア語の呼びかけ」を考えていた「私」にしては、なんともそつげなく不器用な、なんともへりくだった卑屈な表現である。「私」の言葉に対して、その若い男は会話を止め、「私」をじろりと見て一步傍へ下がり、あの女性は、「落ち着いた探るような視線を私の上に滑らせながら」黙って、ワインを「私」に差し出したのであった。彼女の視線は「私の服から靴まで」全身に及び、「私」は「上気し、髪もひどく乱れていたに違いない。私は冷静でも奔放でも、また良い状況にもなかつた。よそ者で権利もなく場違いの男である自分はこの場を乱

「私」はうっとりしてしまふ。彼女の乗っている馬車が通り過ぎる時、「私」は彼女に対して「喜びと驚嘆」を感じるが、それはまた同時に、「なにかある奇妙な刺すような苦痛」を引き起こし、「苦い切迫するような感じ」を与え、「嫉妬とも愛とも或いは自蔑」とも言えるものだった。「光の子」に対するそんな思いを、「私」は宝石商のショーウィンドウの前で宝石を見つめる乞食の心になぞらえ、彼女を自分のものにするなど笑止極まることだと考え、自分の置かれている立場を十分に理解して、一時的に自分の気持ちを留保しようとするのである。

しかしその後、「私」はこの若い女性にオペラ劇場で偶然出会い、事態は急転することになる（第十二章）。彼女は以前と同様、父親とおぼしき老紳士と一緒にいる。彼女のその服装や姿はすべて、「言いようもなく上品で愛らしい子供らしさ」を見せ、「物静かといった幸福さ」を示していた。「私」は彼女をあれこれ見詰め、「小さな驚愕と狼狽のようなもの」に襲われるが、一幕目の休憩の時、この二人のところに、「二十七から三十ぐらいにみえる一人の紳士」がやって来て、彼らに親しげに挨拶するのを目にする。この紳士の身につけている比類ないほど素晴らしいワイシャツ、ごく短く刈った明るいブロンドの髪、縁も紐もない鼻眼、太いというほどでもないブロンドの軽くちぢれた口髭、頬からこめかみにかけての決闘の創痕、非の打ちどころのない体つき、落ち着いた動作、これらすべては、この男が紛れもなく市民的俗物であることを表している。そしてその男は「素晴らしく幸福な自意識」で満たされていた。「彼はおそらく特別抜きん出てはいなかっただろうが、尋常な道を歩み、その道を明瞭で有用な目標に達するまで追っていき、世間すべてとの承認の陰に、一般の人の尊敬を受ける日向で生きているのだった。」誰も少しも悪く言うことはなからうこの紳士が、「私」の心を意識させる女性と睦まじく話しているのを見て、「私」は思わず知らず、この男と自分とを比較してしまう。「ところで私はどうか。私の方は。私はこの低いところに座って、かけがいのない近寄り難いあの女性があのだらぬ奴としゃべったり笑ったりしているのを、遠く闇の中から、恨みがましく眺めているのだ。——除け者にされ、黙殺され、なんの権利もなくよそ者として、並外れた者として、落伍者として、浮浪者として、自分自身でさえ哀れと思える者として……。」この文章においては、「私」の世間か

たり蝕んだりしている。」心の中で「私」は、「世間の人々」を必要とし、「成功、名声、承認、賞賛、羨望、愛」に少しでも価値をおくことができるなら、きっと快適な励ましになるのではないかと考える。「私」には今や、「外的幸福」に対する願いが否定出来ないものとなっている。「その幸福が天才であり、その天才が幸福であるような神の寵児とみなすべき人たち、光の子たち」に寄せる羨望が、「この人たちのひとりでありたい」という願いが「私」には強く存在しているのである。「私」のこの羨望や願いは、「社会」や「世間の人々」から一線を画して「外的幸福」を断念してきたこれまで生き方がまさに間違いであると決断するほどに、「一瞬たりとも疑いのない、疑うことのできない、いや疑ってはならない」ことであつた。これまでの「外的幸福」を無理やり諦めて生きてきた反動でもあるかのように、「私」のその願いには非常に激しいものがあつた。「繰り返して、しかも絶望的な思いをこめて言うのであるが、私は幸福でありたいし、幸福であらねばならぬのだ。△幸福▽とは一種の功績であり天才であり、高貴であり愛すべきものであるという考え方、△不幸▽とはなにか醜い、いかがわしい、卑しむべきことであり、一言でいえば笑うべき滑稽なものであるという考え方、そのふたつが非常に深く私のなかに入り込んでいる。」「私」の「光の子たち」への憧れは、「まるであたかもコウモリかフクロウのように暗闇にうずくまつて、愛すべき幸福な人たちである△光の子たち▽の方に妬ましげに流し目を送つたり、まさしく毒を含んだ愛に他ならないあの憎しみでもって彼らを憎んだりしなければならぬ」とあるように、その激しさは逆説的に表現されている。「私」においては、「疎外」や「哲学的孤立」が引き起こす「不快」や「恐れ」の威嚇するような力に対する一種の憤慨の意識がはつきりとした形で生じている。

第十一章は、二月初旬のある朝の、「私」がレルヒエンベルクへの散歩の途中で目にした「とりわけ美しいもの」について、そしてそれを見て「私」の心のうちに引き起こされた感情について描いている。「私」は二輪馬車の中で上品な老紳士のかたわらに座っている、小麦色の肌のほっそりとした体つきの、「明るい褐色の髪」をした「十九か二十ぐらいの若い女性」を見るのである。彼女は面長の端正な顔をもち、とりわけ目が魅力的であり、その「青春の魅力と快活な瑞々しさに

しかし第九章では、「私」の道化者的生活は初めてはつきりと、疑わしい問題的なものと考えられる。二十七歳になった「私」は、幸福であるという力強い確信をもちながらも、時おりは確かにいささか孤独に疲れることもあった。とりわけ、「私」には一度ならず、交友の無さに対する不満に悩まされることがあった。「私」はこの地に定住してはいたけれども、一般市民とは一線を画していたのだった。上層階級や一流二流の階層との繋がりも、若者たちのなかへフェタール（道楽者）として仲間入りすることも、またボヘミアンとして生きることにも彼にはやっていけることではなかった。「要するに、私は当然属すべき定まった社交界というものはなかった」ので、「私」は世間のなかで自らすわる場所を見いだせなく、引つ込み思案にならざるを得なかったのである。以前から「私」は「社会」からの喝采を求めぬ気持ちもなくはなかったが、「社会」とは縁を切り断念する気持ちをもって、そこからは一線を画して道を進んでいった。しかし次第に、突然襲って来る「哲学的孤立」が「私」の幸福を脅かすようになってくる。ずっと以前は、幸福だという意識や確信は全く揺らぐことだになかったのに、今の自分はあまりにも異なってしまったという自覚が「私」をとらえ、「私」は次のように考える。「私は故郷の狭い世界のなかで、自分の卓越した芸術的な素質を意識し楽しみながら行動していた、かつての自分の暮らしぶりを思い出した。あの当時は、社交的で愛想よく、目は快活や皮肉、あらゆる世間に対する優れた善意に溢れ、みんなの評判では少し変わり者であったが人気者でもあったあの頃、シュリーフォークト氏の大きな材木店で働かねばならなかったにもかかわらず、幸福だった。それが今は、それが今は。」かつてあの材木店で働いていた頃は、自分に幸福なんだといい聞かせなくても幸福だった。しかし今は、あの当時の自分とは随分変わってしまった。今や「私」は自分が幸福でないと感じる。今の「私」には「独居、隠棲、疎外」が意識され、自分がなんだか自分で無いように思われ、「私」は不機嫌な気持ちに陥るのであった。

第十章。「私」は次第に自信をなくし、不幸のなかに落下していく自分を感じる。真夜中に「私」は、「両手を膝に組み合わせたまま天井を見上げ、追い払うことのできなかつた半ば漠然とした苦痛のようなものを、飽くこともなく少し掘り返し

の都に自分の居を移すことを決心する。このあたりの記述にも作者トーマス・マンの生活と重なるところが多く見られる。

第八章、「私」が帰ってきたという「中部ドイツの都」は、中部ドイツとあるが、その記述からして明らかにドイツ南部の都ミュンヘンであると思われる。「それは堂々とした町で、まだあまりに騒がしい大都会の喧騒もなく、あまりに不快きわまる商業の営みもなく、かなり大きな古い広場がいくつもあり、街路も活気とほどほどの上品さを備えていた。周辺には快適な場所が多かったが、私はいつもハレルヒエンベルクという細く延びた丘の上を走っている趣味よくつくられた散歩道を好んで歩いた。」「私」はこのミュンヘンに定住して遺産をもとに金利生活者として、どこに勤めるわけでもなくボヘミアンのような生活を送る。十時に起きて朝食、正午までピアノや読書、そして散歩。いきつけの料理店で食事。さらに散歩して、いろんな街を通り画廊を抜け、郊外に出てレルヒエンベルクの丘に登り、午後、また本を読み、音楽をし、写生をしたり手紙を書いたりすることもある。夕食後、芝居か音楽会、そうでないときはカフェで寝るときまで新聞を読む。これが「私」の昔からの理想にかなった生活であった。まさしくこうした生活はトーマス・マン自身のミュンヘンでの生活を映し出すものである。いつも「私」は、生活にできるだけ豊富な「内容」を与えようとして、食事とか服装とか肉体的欲求には制限を加えたが、オペラや音楽会には高い料金を払ったり、文学書を買ったり、美術展覧会に行ったりして大きな喜びを味わった。しかしそんな生活においても、「私」の心の中には次第に、「満足と信頼のかたわらに、かすかに別のもものが動くようになっていた。つまりそれは、いわばちょっとした恐れとか不安といった感情であり、ある脅威的な力に対する私のある種の憤激と反抗といった軽い意識であり、これまではまぎれもなく一時的のものにすぎなかった私の境遇を、今や初めて確定的で不変なものと思わざざるを得ないといった、少しなりとも心を圧迫するような考えでもあった。」このように「私」は、自分の生活に「満足と信頼」とともに、一時的には「恐れ」「不安」「憤激」「反抗」といったものを一種の「確定的で不変なもの」と感じざるを得なくなり、「世間のすべてや自分自身に対する嫌悪の感情が押さえ難く忍び寄ってくる」こともあったが、総じて言えば、自信に満ちた自分の生活に対する「私」の感情は揺らぐことはなかったのである。

量を嘲りながら、また一方では気に入らなれたい気持ちもちながら、彼らに対して調子の良い愛想をふりまいて、この人たちすべてが私の性行に対して示す漠とした尊敬に良い気持ちになって浸る」ような暮らしを続けたのであった。こうした道化者のような人生が、その後どのように宿命的で不幸なことを生み出すかなど、この章の「私」はまだ全く知る由もなかった。

第六章では、父親の死とその半年後の母親の死、そしてそれに伴う商会の破産などが描かれ、それらによって「私」を取り巻く環境も大きく変化する。しかし、「私」の内部にまでそれは影響を与えることはなかった。「私」は世間の一切のしがらみから免れることができ、十分な遺産を手に入れて、この狭い町を出て広い世界へ入って行く。「もはや、私が育ってきたこの町の人々と私を結び付けるものはなにひとつなくなっていた。彼らの私を見る目はつねに、ますますよそよそしく、ますます呆れたようになってきていたし、彼らの世界観はあまりに一面的で、私にはとても順応していけるものではなくなっていた。「私」は自分が「掛け値なしに無用な人間である」と知っていたが、また一方では「道化者としての才能」を伸ばして、自己満足に浸ろうという気持ちにも全く欠けるところがなく、いそいそと「私」は故郷の町に別れを告げたのであった。

第七章ではその後の三年間の、イタリアやスペインなどでの「貪るような感受性でもって、無数の新しい、様々に変化する印象に身を委ねた」、「美しい遙かな夢のような」「私」のボヘミアン生活が描かれる。それは、必ずしもいままでのように裕福な生活というわけにはいかなかったが、方々の接する人のなかで、「私」は気持ちよく暮らし、人々からよそよそしい視線や疑いの言葉をなげかけられることもなかった。時として、自分なりの「社交的才能」を発揮して人気を博すこともあり、あるときなどピアノの即興演奏で喝采を浴び、ひとりの老紳士に「なんとまあ、驚きました。あなたはほんとに素晴らしい。…あなたはどうしても役者か音楽家にならなけりゃいけません」と称賛され、「私」は少なからず「天才の誇りといったもの」を感じ、ますます自分の道化的才能に自信を増していくのであった。そうした才能が最高潮に達した二十五歳の時、「私」は「落ち着いた規律正しい居を定めた生活にも憧れを感じ始め」たという理由と経済的理由から、中部ドイツ

ことができるのだ。あの子の方としても、みんなに気に入られ喝采を博したい気持ちは十分なんだ。こういう素質でもって成功した者は、今までに随分あるんだからね、あの子もこうした素質があるんだから、他にいろいろばらなところはあっても、まあまあ比較的立派な商人に向いているのだよ。」しかし、父親によってそのように評価されたこの少々あやしげな才能に対して、母親は「あの子はいつか芸術家になるわ」とその方面の可能性を主張するが、そうした言葉に対しても、父親は「そんなものみんな道化のまやかしだよ」と片付けてしまう。「私」は外的生活が変わるといふ見通しから愉快な気持ちになり、商人になることを大真面目に承諾するのであった。すなわち、この章では「私」は、道化的才能を社会とのかかわりによって生かすようにという父親の意志に従い、母親によって芸術家の可能性と評価される自分の中の素質を削ぎ落とそうとするのである。

しかし、「私」はこの材木店に対してほとんど興味をもつことはなかった(第五章)。「私」の変化は全く外的なものにおいてだけであって、内的には相変わらず道化者であり、世間の人々をことごとく馬鹿にしていた。「私」は機械的に仕事を片付け、後はぶらぶら歩いたり、景色を見たり、芝居や演奏会のことを考えたり、本を読んだりして過ごした。とりわけ今や、以前の人形劇は書物に変わっていた。「私は大いに本を読んだ。手に入るものはなんでも読んだ。私の感受性は大きかった。」しかし、材木店に出ないで家にいる時、母親はよく「私」に、「仕事に満足しているか、幸せかどうか」と尋ねるのであったが、「私」はそんな時、いつも疑いもなく幸せだと答えるのであった。つまり、「私」は材木店での見習いの仕事を一時的なものと考え、「いつの日か自由な身になって、この破風屋根の多い町を出て、世界のどこかで好きなように生きる。上手な手の込んだ長編小説を読んだり、芝居に行ったり、少しは音楽もやったりして暮らすという考えが、つねに頭から離れず」、うまいものを食べ、ごく上等な身なりをして、「好意的な軽蔑の目で、貧しい人たちや不幸な人たち、嫉妬する人たちを見下す権力をなんといっても持ち合わせているあの上層の、富裕な、嫉妬される人々に属する一人になるのだ」ということを、すでに意識して陽気になっていた」のであった。父親から「道化者のまやかし」と言われても、「私」は、「彼らの狭

装置とかオーケストラ、共演する芸術家たち、楽屋裏、指揮者によって告げられる序曲の開始による劇の始まり、即興のオペラの進行など、すべての上演の様子はトーマス・マン自身のその遊びを彷彿させる。人形劇は「十三か十四歳の頃までの私の一番好きな遊びであった」というように、「私」は幼い頃から芸術的なものに関心が強く、他の子供たちとは違っていたというのも、まさしく作者トーマス・マンの現実そのものである。

さらに第三章でも「私」の幼少年時代のこと描かれるが、まさにトーマス・マン自身の伝記を読むようである。恐ろしく腕白で、家柄が良く、教師の物まねが模範的にうまく、いろんな役者の身振りができ、一種大人びた言葉を使うことなどで、「私」は仲間の尊敬と人望を得たのであった。しかし当然のように、「私」は教師の動作から滑稽さを捜し出したり、家ではオペラの材料を探すことにあけくれたりすることで、勉強の方は芳しくなかった。父親は「私」の成績をみて、将来どんなものになるのだろう、生涯人並みなどころまでいくことはなからう、と嘆くのであった。また「私」の書いた詩を聞いても、「なんとという馬鹿げたことだ」と父親は全く「私」の才能を評価しない。それに反し、母親は「私」の芸術的才能を十分に認めるのである。半年間続いただけの、正式な指の使い方や拍子を覚え込むことにも適していない程度の芸術的才能しか示さなかった「私」のピアノの練習でも、彼女は「弾き方には良い趣味がみえる」と高い評価をするのであった。しかし月日が経つと、知人や仲間たちのうちでも陽気で人気者であった「私」も、「無味乾燥で空想など知らない人たちをある種の本能から軽蔑し始めるのであった。」

こんな幼少年時代を送っていた「私」も、十八歳ぐらいになると外的な生活を変えざるを得なくなる（第四章）。父親の意志に従って、「私」は学校を中退し、商人になるために大きな（あの小男フリーデマン氏と同じ）「シユリーフォークト氏」の材木店の見習いになる。父親は、「私」の才能を「道化役者」の才能と決めつけ、息子にこのまま学校を続けさせても全くものにならないと考え、母親に次のように話す。「おまえの言っているあの子の才能というのは、ある種の道化役者の才能だね。…あの子はその気になれば、愛想よくすることができる。みんなと交際して楽しませたり、ご機嫌をとったりする

見るように、それは失敗に終わっている。この短編小説の最後では、「私」は「嫌悪」で胸が一杯になって書くのを止め、「これからも不幸な笑うべき存在であることに馴れていく」のではないかと恐れている。自分の「特異性を認識によって論理的に根拠づける」という試みは放棄され、宿命論的な考えでこの短編小説は締めくくられる。「全くもって、へ道化者Vとして生れつくことが、こんなにも不運であり不幸であろうとは、誰が考えたであろう、誰が考えることができたであろう。」最後の終結としてここには、道化者として生まれたことの嘆きがあり、道化者としての自我の問題は解決されずに放置されている。

この短編小説は、通読してまず気付かされるのは、作者トーマス・マンの自伝的要素の濃い作品であるということだろう。そのことが最も強く現れているのが第一章である。まさしくそこに描かれるのは、彼がしばしばエッセイや後の長編小説『ブッデンブローク家の人々』で語るような、彼の生まれ故郷リューベックであり、彼の我が家そのものである。「あの小さな古い町は狭い、街角の多い、破風屋根のある通りと、ゴシック風の教会や泉、働き者で堅固で素朴な人々の住んでいる、大きくて古色蒼然とした素封家の屋敷のある町であった。」「私」の育った屋敷は「町の中央にあり、裕福で名望のある商家として四代続いていた家で、玄関の上にはラテン語でへ祈れ、そして働けVと刻まれて」おり、母親は居間でピアノを弾き、おとぎ話をしてくれるような、「夢見るような」女性であった。父親は「大柄で肩幅の広い」堂々とした北方系の市民であり、「公の事柄に大きな影響をもつ勢力家」であった。「私」は人生を、母親のように「夢みるような思いのうちに過ごすか」、父親のように「行動と権力のうちに過ごすか」悩むが、最後には、母親の生き方の方に自分の道を見つけ出す。この章には、「私」の「生涯で一番幸福で平和な」幼少年時代が描かれているが、それはまた作者トーマス・マンの幼少年時代そのものである。

トーマス・マン自身、自分の幼少年時代の遊びとしてしばしば語る人形劇については、第二章全体にわたって描かれている。「私」は「全くひとりきりで自分の部屋に閉じこもってとてつもなく奇妙な音楽劇を演出する」のであるが、その舞台

確かにこの短編小説は、社会において自分の役割を演じようとしながらも社会の拒否に会うひとりの道化者の物語であるので、その表題は相応しいものであったろう。

短編小説「道化者」は十四章から成っている。しかし、その前後に短い「プロローグ」「エピローグ」と言うべきものが付け加えられていて、このふたつを読むと、この短編小説が道化者である主人公の「私」の、——後に二十七歳であることがわかるが——「身の上話」であり、それがどのような状況のなかで語られたものが理解できる。冒頭には次のようにある。「すべての最後に、実際あのすべてのことの立派な終結として、人生が——私の人生が——へあのすべて、へあの全体Vが私に注ぎ込んでいるものは嫌悪である。」「人間の内的体験というものは、その人間が外的に、束縛もなく自由に世間から離れて平穏な生き方をしていなければならないほど、ますます強くなります。心身を消耗させるものではないか。だが、そうだとしてもどうにもならない。人間は生きてゆくより他に仕方がないのだから。」この冒頭の文章には、人生に嫌悪を感じ、生や存在の危機に直面しても、それを生きて行くしかない「私」の苦悩の状態が説明されている。「私」はその苦悩の「身の上話」を物語ろうとするが、その理由としては、「ともかくどうにかしなければならぬ」、心理的な興味から「そのすべての必然性を味わい楽しもう」、「ちよつとでも、自分自身に対する一種の優越感や無関心を享樂する」、といった理由が挙げられているが、要するに、「私」のこの「身の上話」は、人生や存在から疎外されて苦悩するひとりの孤独な人物の自己省察であり、自分のこれまでの苦悩に満ちた生涯を心理的に分析して慰めや優越感を獲得し、自分の「外的に束縛もなく自由に世間から離れての平穏な生き方」に肯定を見付けだして、これからも内面に生きることの可能性を明らかにしようとする、いわゆる問題的な自我についての内面の記録なのである。しかしこの短編小説にはただ単に、道化者という特異な人間の主観や、その体験する疎外とか孤立といった特殊な状況が示されるだけではなく、その特異性を認識によって論理的に根拠づけようとする姿勢が明確になっている。

しかし果たして、その根拠づけようとする姿勢はどのような結末を迎えるのか、ということになると、「エピローグ」に

している。こうした仮面の使用は、短編小説『小男フリーデマン氏』以降、トーマス・マンの短編小説を書く際のひとつの技法ともなっている。

以上のように、トーマス・マンは『小男フリーデマン氏』において、「用心深く守られた生活への情熱の侵入」という「根本モチーフ」を創作のための「形式」として獲得し、さらに、主人公の小男フリーデマン氏を芸術家についての「自分の愛や憎しみ、同情、軽蔑、誇り、嘲笑、非難」などを表現するための「仮面」として登場させることによって、自分の問題を短編小説として表現でき、作家として「文学への本当の突破口」を見つけたのである。その意味で、短編小説『小男フリーデマン氏』はトーマス・マンの生涯の「ひとつの境界石」として、彼のその後を開く画期的な出来事であった、と言えるのである。

### (三) 短編小説『道化者』(一八九七年)

短編小説『道化者』は一八九七年四月に完成したが、元々、この作品はすでに完成していたある短編小説の改作小説であった。トーマス・マンは一八九五年春、最初のイタリア旅行の前であったが、『ヴァルター・ヴァイラー』という短編小説を書き上げていた。彼はそれをその年の五月十五日付けで雑誌『パン』の発行人であるリヒャルト・デーメルに送り、彼のその雑誌に採録してくれるように請うている。結局、その作品は掲載されず、現在、その原稿は散逸して残っていない。またその後も、この作品の雑誌『社会』への掲載が拒否されたという事情もあって、トーマス・マンは一八九六年冬から翌年にかけてローマでこの作品に手を加え、とりわけ、三人称形式から「私」という主人公の一人称小説に変更したり、テーマをより明確にディレクティブイズムに向けたものに改作した(H・R・ファージェット「トーマス・マン全短編小説注釈」)。「小男フリーデマン氏」が一八九七年五月に発表された後の同年九月、この改作短編小説は『道化者』という表題に改められて雑誌『新ドイツ展望』に発表され、一八九八年春には短編小説集『小男フリーデマン氏・短編小説集』に収められ出版された。

れた生活へ」ゲルダという「情熱」が「侵入」してくる話であり、確かにそうした「情熱」の登場はここでは、それ以前の作品には見られないほどはつきりとした形を取っている。さらに要約して言うならば、トーマス・マンの言う「形式と仮面」の「形式」とは、「小男フリーデマン氏」において初めてはつきりとした形を取り、トーマス・マンの全作品を通じても見られるものとなった「用心深く守られた生活への情熱の侵入」という「根本モティーフ」のことなのである。

では「仮面」とはなにか。「小男フリーデマン氏」において初めて現われ、その後トーマス・マンの全作品を貫いた「仮面」とは一体なにであろうか。仮面とはまさしく、なにか本来のものを、或いは本心を隠そうとするマスクであり、そのことをこれまでの「小男フリーデマン氏」についての考察に当てはめて考えれば、「仮面」が明らかに主人公の小男フリーデマン氏に託されているものを指していることは理解できよう。すなわち、この短編小説の主旨から言えば、主人公の小男フリーデマン氏はひとつの仮面であって、彼はなにかを表現するために、小説上でなにかを模して登場しているのだった。それでは、主人公小男フリーデマン氏に託され、彼が模しているものとはなにであろうか。当然そこに、その徹底されたアウトサイダー性によって芸術家というものが表現されていることは、これまでのこの短編小説の考察からも明らかであろう。

トーマス・マンの作品にはしばしば異常なアウトサイダーが主人公として登場し、世間から冷たく扱われ孤立している。しかし小男フリーデマン氏はただ単にアウトサイダーそのものとして描かれているのではない。彼は芸術家のパロディなのであり、作者トーマス・マンは彼の姿を仮面にして、自分の芸術家についての見解を述べている。トーマス・マンは仮面をつけて小男フリーデマン氏として登場し、その人物を通して「自分の愛や憎しみ、同情、軽蔑、誇り、嘲笑、非難」を表現しているのである。そうした、異常なアウトサイダーを仮面にトーマス・マンの芸術家観がより明確になっているのが「小男フリーデマン氏」以降であり、次の短編小説「道化者」においては、主人公をただ単に「私」として登場させることによって、より鮮明にそのことが表明できるようになっている。またその次の短編小説「トビアス・ミンダーニツケル」の非常にグロテスクな異常な主人公は、芸術家のもつ問題的な生に対する諸々の不安や憧れを表現するために「仮面」として登場

害を肉体的欠陥として明らかにしている。フリーデマンのせむしや、クラウス・ハインリヒの萎縮した手はこうした精神的障害を表現しているのである。」(H・ヴェスリング/Y・シュミートリン「トーマス・マン、絵で見る人生」)。確かに、そのとおりであろう。しかし筆者には、トーマス・マンが再三挙げているこの「形式と仮面」という言葉は、もっと深いところから、つまり彼の作家としての「突破口」「境界石」となった作品として、「小男フリーデマン氏」に深く立ち入って考えられるべきもののように思われる。というのも、私たちはその「形式と仮面」の意味するところを、「小男フリーデマン氏」について「文学への私の本当の突破口」「ひとつの境界石」と指摘した彼自身のエッセイ「自分のこと」のなかの文章から導き出すことができるからである。トーマス・マンはこのエッセイのなかで、「小男フリーデマン氏」について次のように説明している。「主人公は不具に生まれついていながらも、賢く柔軟に、穏やかで哲学的に、自分の運命を甘受するすべを心得ていて、全く平静と瞑想と平和に自分の生活を送っている人物です。びっくりするほど美しく、しかも冷酷無慈悲なひとりの女性の出現は、この用心深く守られた生活への情熱の侵入を意味します。そしてその情熱は築き上げたものをすべて転覆させ、その物静かな主人公自身をも滅ぼしてしまうのです。」そしてこの文章に続いてさらに、「小男フリーデマン氏の物語が初めて打ち出し、私の全作品をいわば統合している一貫した根本モティーフ」について、ヨゼフ物語に言及して説明がなされている。それによると、「個人の内密な世界に向けられた私たちの眼」が見つめるものは結局、「人間の生の中に反復して現れる」「災厄の観念」であり、それは「個人と人類との同一性を感じさせ認識させる」ものであるという。そしてさらに、それは「平静な世界の中に、そして自制という制約された幸福や尊厳に対するあらゆる期待とひそかに結託している生の中に、陶酔的な破滅、破壊の力が侵入してくるといふ考えである」と説明される。すなわち、ここでヨゼフ物語について長く言及して明らかにされている、「小男フリーデマン氏」に始まってトーマス・マンの全作品を貫いている「根本モティーフ」とは、彼がこの短編小説にしてしばしば強調する「用心深く守られた生活への情熱の侵入」のことであるといえる。「小さなせむし男のこの陰鬱な物語」である「小男フリーデマン氏」はまぎれもなく、主人公の「用心深く守ら

を生かすことのできる場を得たような、そして、今初めて自分のことを表現したり伝えたりする手段が自分に備わってきたような気持ちになっております。：『小男フリーデマン氏』以降、私は突然、自分の諸々の体験を携えて世間に出て行くことのできる、内密の形式と仮面を見つけることができました。」（傍点筆者）。さらにこの同じ友人に宛てたその年の七月二十一日付けの手紙では、彼は次のように書いている。「少し前から私は、自分の思いを自由に發揮できるような、自分のことを述べたり表現したり芸術上で自分の才能を生かしたりすることのできる手段と方法を見つけたような気がしております。かつて私は日記を用いて、まさしく自分の心の小部屋をさらけ出していましたが、今は、公にできるような短編小説上の形式と仮面を見つけ出して、そこに自分の愛や憎しみ、同情、軽蔑、誇り、嘲笑、非難を表現することができるようになりました。：それは『小男フリーデマン氏』から始まったと思っています。」（傍点筆者）。一八九七年のこのふたつの手紙は、トーマス・マンにおいてこの短編小説が「決定的転換」であることを伝えている。彼はこの短編小説によって作家としてやっていける自信を得ることができたということであり、その意味から言えば、トーマス・マンの作家としての生涯において、短編小説『小男フリーデマン氏』は画期的な作品であると言うことができよう。そしてそのことは、彼のこの短編小説についての、「文学への私の本当の突破口」「ひとつの境界石」「自分のこと」という、彼自身の後の指摘に繋がっていく。では「自分の諸々の体験」を公にすることができ、「自分の愛や憎しみ、同情、軽蔑、誇り、嘲笑、非難を表現することができ」「形式と仮面」というのは一体、短編小説のどのような要素を、また具体的には「小男フリーデマン氏」のどのような点を指しているのだろうか。トーマス・マンはこの「形式と仮面」を得て、自分の言いたいことを芸術的に表現できるようになり、短編小説という形式で創作することができるようになったという。この短編小説以前の、「転落」や「幸福への意志」、「幻滅」などにおいては存在しないで、「小男フリーデマン氏」において初めて現われ、そしてその後彼の作品に必ず引き継がれていったものとは一体何であろうか。

この「形式と仮面」に関して、次のように指摘している評者もいる。「トーマス・マンはこの時以降、主人公の精神的障

## 若いトーマス・マン〔六〕

——小説と小説家のあいだ——

岡光一浩

(二) 短編小説『小男フリーデマン氏』(一八九七年) ——承前——

では最後に、短編小説『小男フリーデマン氏』についてのこの考察の冒頭に書いた、『小男フリーデマン氏』が「文学への私の本当の突破口」であるという、トーマス・マン自身の指摘について考えてみよう。この短編小説のどのようなところがトーマス・マンにおける「文学への本当の突破口」となり、彼自身の生涯において「境界石」となったのか、この小説のなにが画期的な出来事なのか、という点である。

すでに述べたことだが、一八九六年九月二十七日付けの友人オットー・グラオトフに宛てた手紙でトーマス・マンは、「私の作品に関して言えば、あなたもご存じのように『ジンプリチムス』に発表された『幸福への意志』の後、ひとりのせむし男の物語であります比較的長い短編小説『小男フリーデマン氏』を書きました。これはまだどこに送ってやら分らないでいます」と書いている。この手紙に初めて『小男フリーデマン氏』の名前が出てくるように、この短編小説はトーマス・マンが二度目のイタリア滞在に出る直前の一八九六年九月に完成したようである。その後彼は翌年四月六日、この友人に宛てて次のような手紙を書いている。「私は実際、自分の将来の作品に対して意欲と自信をもって向かっていくことができるような気がしております。少し前から私は、なにか足かせのようなものが取れたような、今初めて芸術的な自分の才能